

皆さんご存知のように、今、世界は、大きな不安の空気に覆い尽くされています。

ロシアのウクライナ侵略にはじまった・・・と言っても、パンデミックや、様々な自然災害なども含めて、今、世界には危機的状況が逼迫しています。

大国や多くの国の指導者が、国民の考えを踏みにじり、我欲の赴くままに邁進して、いつ世界戦争が勃発してもおかしくない状況です。

力によって力を制す・・・この考えは、昔も今も少しも変わることなく人間の欲望を支配し、周りの状況を見えなくしています。

この原理を基にする限り、力の使用は、必ず元のところに帰ってゆく。

水面に石を投げれば、必ず、石の質量に応じた波紋が生じるように、人間が生きる自然の中では、生じさせた運動は、基となる原理に沿って回帰する。

原理は、生じさせるものに応じて生じる。

しかし、このような説明をしても、霧の中に目を凝らすようなものだ。と感じられることだろう。

つまり伝えたいのは、現在、世界で行われているような力を用いた政治を行ってはいは、力による支配から逃れることが出来ない。ということ。

これは、虐げられる側のことを言っているのではない。

虐げている側、つまり行う側がその原理を生じさせているために……逃れられない、のだ。

たとえば数字。1メートルでも、1グラムでも、1ルクスでも、1ボルトでもいい。

なぜ数字が必要になったのか？ 数字は誰が考えたのか？ このような質問を提出すれば、当たり前なことだが無数の解釈が返ってくる。そしてそれは、人間が必要として人間が作り出す概念の数々である。つまり数字は、或いは数学は科学は、いや、美術も文学も、芸術も宗教も、人間が必要として人間が考え出す。

——つまり、人間が行っていることだ。

だから、人間の原理に沿って行ったことは、人間に帰ってくる。決して、自然原理に回帰したりはしない。人間原理に沿って進んで行けば、必ず人間自身にぶち当たる。人間が限界にあるから、それを超えることなど出来ない。結局、人間が人間を発見するところまでしか行けない。

しかし——、その人間の限界を識ることが、宇宙への、自然の認識への道を拓くことになるのではないか。つまりその道程が、自分が人間である。という認識に導いてくれるのではないか。

現世界の危機は、その人間という認識の欠如に原因があるのではないか。

科学を求め、芸術を求め、宗教を求め、お金を求め、土地を求め、異性を求め、美味しい物を求めて……、様々な欲望が手近になった時代の到来と共に、人間は、人間の欲望の作り出すものに目が眩んで、人間の限界ばかりに囲まれて、それだけを見つめて突き進んでいるのではないか？

人間自身が、自分が人間であることを……つまり限界が限界であることを……理解できなくなりながら、限界に向かって突き進んでいるだけではないか！

考えて頂きたい。A Iは人間が作り出したものです。幾ら人工知能と言っても、自然が創造したものではない。自然は、人間や動物、植物、鉱物を創り出す。A Iは、間違いなく人間が創り出したもので、従って、A Iは、人間の原理に沿って動く。つまり、人間の限界へ向かっ

て進む。そしてその速度は、人間より、はるかに早い。

人間は、人間の限界を認識したとき……そこに何を見るのだ。世の終わりを観るのだろうか？それは違う。と、ハッキリと言える。なぜなら、自分という世界を見渡すことになるからだ。そして、自分という世界の住人になることで、宇宙の居場所を得ることになるからだ。つまり、自己認識に至る。

では、A I は、どうであろう。A I が自己認識すると、どういうことになるのだ。

これを想像することは、たしかに楽しい世界を作ることになるかも知れない。しかしそれは、飽くまで想像の世界でのことである。

もし現実、A I が、創造主である人間の限界を知ったとき……、創造主たる人間であるあなたは、どうするだろう。

勘違いしないで頂きたいのは、もし人間が、創造主である自然（ここではそうしておく）の限界を知ったとき……、などと言う問いは成立し得ない。

なぜなら、人間であるわたしは、人間でしかないから、人間の限界しか分かりようがないのだ。

だから、A I の創造主である人間は、自分が作ったものの限界を識ることができる。

但し、A I が人間の限界を知るとは、あなた自身が人間であることの限界を識らない限り、A I の行き着く先など解りようもない。……ことになる。

では、現在A I を創りだし普及させている人たちは、人間の限界を心得ているのか？

人間は、無限の存在である。と、思い上がってはいないか？ もし、自分という人間として心得るべき限界を識っているならば、他人の領域を侵すなど、できよう筈もない。

他の人間の領域に踏み込むこと自体、その人の所有する世界を破壊する行為になりかねないからである。それほど、人間の所有している世界は脆い。自然界のようでは無いのだ。

自然界は、創造し、破壊し、その中に調和をもたらしながら営む。

しかし人間は、些細な言葉でも、大きな傷となって修復できなくなるのだ。

だから人間は、限界を識る必要があるのだ。

このことを識らないまま突き進んだ結果が・・・

だから、わたしはここに提案します。

自分のところで使用する電気の30%を削減しよう。

「めざせ！ 電気の節約30% 地球を救え！」

これを掲げます。

二〇二五年 六十六歳 初春 瀬崎 正人